| | |
|---|---|
| 学 会 名 | リハビリテーション・ケア合同研究大会山梨2024<br>（2024年10月3日～10月4日） |
| 研究テーマ | KOMIケア理論を活用した認知症患者への徘徊から散歩に変えるアプローチ |
| 病 院 名 | 医療法人社団健育会 石巻健育会病院 |
| 演　　者 | ○村上真樹（准看護師）<br>佐藤和（看護師）三浦萌唯（看護師）種市良盛（医師）<br>小野寺泰弘（作業療法士） 小林哉太（理学療法士）佐々木大介（薬剤師）<br>須田佑美（管理栄養士）吉田隆（医療相談員） |

**概　　要**

【はじめに】
今回、徘徊する認知症患者の全体像を評価するためKOMIケア理論を用いてアセスメントを行った。
評価に基づいたケアを行う中で“散歩がしたい”という患者の想いに焦点を当て、徘徊から散歩に変えるアプローチを行った事例を報告する。

【症例】
80歳代男性、左硬膜下血腫、妻・長男夫婦・孫と同居。
入院時HDS-R14点、FIM認知項目19点、運動項目75点、認知症高齢者日常生活自立度Ⅲ。
既往に肺癌あり。 難聴あるがコミュニケーション可能。
入院前は自転車で買い物や自宅周囲の散歩・畑仕事を行っていた。前医で数回転倒歴あり。
KOMIケア認知症スケールを用いてアセスメントし、看護計画を立案した。

【経過】
入院時より歩行状態は安定していたが、部屋の場所を迷ってしまう事から離棟リスクが高く、また毎日のように徘徊があり行動に注意が必要であった。
KOMIの認知症スケールを用いてアセスメントを行い、本人の“散歩がしたい”という想いを尊重する為、自立維持のプログラムを創った。
多職種で自然なスキンシップを図り、否定的な声掛けはせず、習慣的に行ってきた散歩が継続出来るよう統一したアプローチを行った。
その結果、患者の持てる力が引き出され認知機能が悪化する事なく自宅へ退院することができた。

【考察】
KOMIの認知症スケールを活用し一歩踏み込んだアセスメントを行った事で、患者のなじんだ暮らしを尊重し、心地良いと思える刺激が提供できた。患者目線による認知症ケアの展開が患者の持てる力を引き出す事に繋がったと考える。

【おわりに】
退院後訪問指導では、患者・妻より自宅周囲を迷うことなく趣味の散歩が出来ていると笑顔で教えて頂いた。
入院時からその人らしさを追求し、退院後の生活を見据えてチームアプローチすることの重要性を学ぶ事が出来た。
今後も患者の個別性に沿った看護を提供出来るよう、多角的な視点で患者と関わっていきたい。